

中国語の語順指導について

—標準的語順のシステム化—

鈴木 進一

1. はじめに

言語類型論の分類法の1つでは、日本語は「膠着語」に、中国語は「孤立語」に属している。

膠着語とは、単語に様々な接辞が付くことにより、文中におけるその単語の文法的機能が明示される言語である。日本語の場合は助詞が単語の後に付く。この助詞が付くことで文中における単語の文法的働きが明確になり、単語をどの置いても文として成立する場合が多い。つまり日本語の場合、「語順」は比較的自由である。

例えば、

- (1) 僕はギョウザを食べる。よ。
- (2) 僕は食べる。よ、ギョウザを。
- (3) ギョウザを、僕は食べる。よ。
- (4) ギョウザを食べる。よ、僕は。
- (5) 食べる。よ、僕はギョウザを。
- (6) 食べる。よ、ギョウザを、僕は。

発話の自然さの度合いに違いはあるものの、様々な場面を考えてみれば、日本語ではどの表現も使用することができる。

一方、孤立語の中国語ではどうであろうか。それぞれの単語に対応する中国語は、私＝我、食べる＝吃、餃子＝餃子で、この3つの単語を並べ替えてみると、次の6通りの語順が考えられる。

- | | |
|-----------|------------|
| (7) 我吃餃子。 | (10) 吃餃子我。 |
| (8) 我餃子吃。 | (11) 餃子我吃。 |
| (9) 吃我餃子。 | (12) 餃子吃我。 |

この中で中国語の文として正しいのは(7)で、他にかろうじて(11)が使えるくらいである。このように中国語では、「語順」が日本語よりもはるかに厳格である。

私たち日本人が中国語を学習するとき、苦労する点の1つとしてこの語順が挙げられる。中国語には、日本語の助詞に当たるような文法成分がないために（中国語文法にも「助詞」と呼ばれる品詞はあるが、日本語の助詞とは働きが異なる）、語順だけを頼りに格関係を表現しなければならず、私たちのような中国語と異なる系統の言語使用者にとっては、中国語で表現した文の正否を判断するのがなかなか困難である。

中国語のテキストでは、しばしば「動詞述語文」とか「形容詞述語文」とかという表現で、文の構造を表現しているものがある。しかし、これでは文全体の統一的構造が把握しにくいという欠点がある。そこで本稿では、中国語文の基本構造を、英語の5文型のような方式を利用して整理する。更に副詞、助動詞、前置詞（句）など、初級テキストによく現れるいくつかの品詞が、基本構造の中でどこに置かれるかについてまとめ、全体を公式化する。これによって初級中国語学習者が、中国語の「語順」で迷うことがないようにしたいと考える。

2. 文成分と品詞

日本の英語教育では、英語の文型に関してイギリスの言語学者 C. T. Onions が発表したいわゆる「5文型」が長い間教えられ、それは現在でも続いている。例えば、その中の第3文型と呼ばれるものは、S+V+Oという式で表現され、(主語)+(動詞)+(目的語)という語順を意味している。これを見ると、主語、動詞、目的語が1直線上に列をつくって順に並んでいるように連想させられる。

ところが、呂叔湘は主語と目的語(以下の引用文中では目的語を「客語」と記している)は、同じ平面の1直線上にはないと指摘している。

はっきり見分けないければならない次の点もいっそう重要である。それは主語と客語とは対峙する二つの成分ではないということである。主語とは述語に対して、客語とは動詞に対していっている。主語とは文の組み立てについていっており、客語とは事物と動作との関係についていっている。主語と客語の位置は同じ平面上にないし、同じ軸にないともいえるので、もちろん対立したものにはなれない。(呂叔湘1983 pp.74-75)

つまり主語と述語の組と、動詞と目的語の組を同じレベルで論じることではできないというのである。従ってこの主張によれば、S, V, Oを繋ぎ合わせたS+V+Oなどという式は、本来“+”で繋ぎ合わせることも自体が不可能なこととなる。

ここで上の引用文について説明を付け加えると、文中で筆者が下線を施した2箇所のうち、最初の「文の組み立てについて」とは、文を構成する成分、例えば主語、述語、目的語などの「文成分」についてのことで、中国語では一般に6つの文成分を考える。また、もう一つの「事物と動作との関係」とは、目的語と「品詞」と

しての動詞との関係のことである。中国語の品詞分類については、文法学者によって分類の仕方が様々である。『中国語学新辞典』(1970年)の分類によれば、表1の通り11に分類されている。

表1 文成分と品詞の分類

文成分 (6)	品詞 (11)
主語	名詞 (含方位詞)
述語	動詞 (能願動詞, 趨向動詞, 判断詞)
客語 (目的語)	形容詞
補語	数詞
限定語 (連体修飾語)	量詞
状況語 (連用修飾語)	代詞 (人称代詞, 疑問代詞, 指示代詞)
	副詞
	介詞
	連詞
	助詞 (構造助詞, 時態助詞, 語気助詞)
	嘆詞

さて、呂叔湘が指摘するように、S, V, Oを同じレベルで論じるのは文法論的に問題のあることが分かったが、一方で我が国の英語教育において、S, V, O等で整理した5文型方式が100年以上も教育現場で続いてきたことを考えると、その簡便さと、継続してきたことによる定着率はすでにかかなり高いと考えられる。本稿では、理解し易さを第一と考え、初級中国語の学習者に対しても、英語教育におけるこのS, V, O等を使った方式を中国語教育に応用して、中国語の基本文型を整理して行くことにする。

次節の第3節から第5節までは、S, V, O等で整理するための理論的な基礎固めをし、第6節で中国語の基本文型をまとめる。

3. 動詞と形容詞の区分

日本語や英語においては、動詞と形容詞の区分は形態上からも区別できる場合が多いが、厳密な意味での形態変化をもたない中国語では、

形態上から動詞と形容詞を区別することはできない。

この点について、呂叔湘も次のように説明している。

西洋の言語では、動詞と形容詞は形態の面でも、機能の面でも大きな違いがあるので、二類に分けなければならない。しかし中国語の形容詞と動詞は、多くの共通した特徴をもっており、しかもそれは重要な特徴である。すなわち、双方とも直接述語になり、“不”を用いて否定され、“A不A”という形式で問いを発することができるなどである。だから、もしこれらを二つの品詞に分けるならば、文の方式を説くときに、いつも‘動詞あるいは形容詞’と言わなければならないとなり、とても煩わしい。もちろん、ある特徴では両者には違いがある。例えば、動詞の多くは“没”を用いて否定することができ、“了”をつけることができ、かなりのものは“着”や“过”をつけることができ、二音節動詞は多く全体をくりかえせる（A B A B）が、形容詞でこのように用いられるものは多はない。しかし、これは単に多いか少ないかの違いであり、あるかないかの違いではない。（呂叔湘1983 pp. 33-34）

つまり、動詞と形容詞を「文の方式を説くときに」、言い換えれば統語上から説明する際に、2つに分けるのは煩わしいといい、両者の違いというのは、「あるかないかの違いではない」つまり動詞と形容詞を区分する決定的な問題ではないといっている。

動詞と形容詞の区分について上記のような問題点があることを確認した上で、では実際文法書ではどのように分類しているか、ここでは朱徳熙の『文法講義』（以下では簡単に『講義』と記す）を見てみることにする。『講義』では、2つの文法的機能に着目して動詞と形容詞を分

けている。

- ① “很”の修飾を受け、且つ目的語をとることができない述詞は形容詞である。
- ② “很”の修飾を受けないかあるいは目的語をとることのできる述詞は動詞である。

（『講義』p. 65）

ここで使われている「述詞」という訳語は、述語となれることばのことで、中国語では動詞（句）、形容詞（句）、名詞（句）が述語となることができ、それらを述語とする文をそれぞれ「動詞述語文」、「形容詞述語文」、「名詞述語文」という。

『講義』ではたくさんの例を挙げているが、ここでは紙数の関係からそれぞれで挙げられている例のうち、最初の3つだけを採用上げる。

表2 動詞と形容詞の分類

分類	“很”+__	__+目的語	例
1	+	+	想[思う, 思慕する], 怕[恐れる], 爱[愛する]
2	—	+	唱[歌う], 念[声に出して読む], 看[見る]
3	—	—	醒[醒める], 瘫[半身不随になる], 歇[一服する]
4	+	—	大[大きい], 红[赤い], 远[遠い]

（『講義』p. 66）

上の①と②の定義から、表2の分類のうち、1から3までが動詞となり、4が形容詞となる。ここでは形容詞が目的語をとらないとしているが、次節では形容詞も限定的な目的語をとることを示す。

4. 自動詞・他動詞と目的語

一般に、動詞は目的語をとるか否かによって分類され、目的語をとらないときが「自動詞」、目的語をとるときが「他動詞」である。

しかし『講義』では、中国語の自動詞について、更には形容詞についても目的語を考えている。では、自動詞や形容詞がとることのできる目的語とはどのようなものであろうか。『講義』では、よく見られるものとして、次の3種類を挙げている。

- ① 時間の長さ、行為の回数あるいは程度を表す目的語

休息了一会儿[しばらく休憩した](自動詞)

醒了两回[二度目が醒めた](自動詞)

大了一点儿[少し大きい](形容詞)

- ② 移動先を表す場所目的語

飞昆明[昆明に飛ぶ](自動詞)

来北京[北京に来る](自動詞)

去学校[学校に行く](自動詞)

- ③ 存在、出現あるいは消失を表す存現目的語
新到了一批货[新しくひとまとまりの品物が入荷した](自動詞)

来了个客人[一人来客があった](自動詞)

死了父亲[父が死んだ](自動詞)

(『講義』pp. 67-68)

自動詞や形容詞がとることのできるこのような目的語のことを、『講義』の中では「仮性目的語」(中国語では‘准宾语’)と呼び、それ以外の目的語のことを「真性目的語」(中国語では‘真宾语’)と呼んでいる。

上記の例から、他動詞も次のように仮性目的語をとることがわかる。

- (13) 你念好几遍。(君は何度も読みなさい。)

この例では、“念”(～を読む)が他動詞で、“好几遍”(何度も)が行為の回数を表しているから仮性目的語である。

従って、とり得る目的語の種類から動詞や形容詞を分類すると、他動詞は真性目的語そして仮性目的語をとる動詞で、自動詞は目的語をとらないか、仮性目的語をとる動詞である。また述語として使われた形容詞も、目的語をとらないか、仮性目的語をとるということができる。これらについて例を挙げると次のようになる。

- (14) 我买衣服。[S+他動詞+真性目的語]
訳：私は服を買います。

- (15) 他去上海。[S+自動詞+仮性目的語]
訳：彼は上海へ行きます。

- (16) 今天暖和一点。[S+形容詞+仮性目的語]
訳：今日は少し暖かい。

5. 判断詞“是”について

しばしば「判断詞」と呼ばれる“是”は、初級のテキストにおいては「動詞」として導入されることが多い。しかし、動詞として取り扱うには問題があることを、藤堂(1980)では次のように指摘している。

しかし、じつは動詞ではありません。“都是～”“也不是～”のように、“是”には副詞(都や也)をかぶせることができ、また“是!”“不是!”のように、独立して使うこともできます。その点は動詞に似ています。しかしそれには、動詞の特色である「態の表現」がありません。“×是了”(完了態)、“×是着”(持続態)などの言い方は存在しませんね。また“×没是、×没不是”のような“没”をそえた否定の言い方ありません。

(藤堂1980 p. 78)

“是”の呼び方については、中国の文法書でも“系（繫）词・同动词・动词”などいくつかの異なる呼び方が使われているが、いずれの呼び方を使っても問題点があると『中国語学新辞典』（p. 74）では指摘している。

初級中国語の授業では、中学や高校の英語の授業で既習の「be動詞」のような動詞として導入し、学習段階や学習者の理解度に応じて説明を加えていくのが一番適切であると考ええる。

さて、判断詞“是”の後に続く部分の呼び方については、中国の文法書の中には“表語”（表語）という呼び方もあるが、その文法的機能は朱德熙の『講義』に従うならば、これも仮性目的語である。ただし『講義』では、“是”の後に名詞、代名詞がきた場合のみそれらを仮性目的語と考えている。例えば、

(17) 他是大学生。[S＋判断詞＋仮性目的語]
訳：彼は大学生です。

(18) 我们的代表是他。
[S＋判断詞＋仮性目的語]
訳：私たちの代表は彼です。

下線部の名詞“大学生”，代名詞“他”が仮性目的語である。

6. 中国語の基本文型

第4節においては、『講義』の説に従い、述語として使われた形容詞も目的語をとる場合があることを認め、その目的語を「仮性目的語」とした。そこでこの述語としての形容詞を動詞の1つとして、ここからは「状態動詞」(stative verb)と呼ぶことにする。

これまでに出てきた他動詞、自動詞、状態動詞、判断詞とそれらがとる目的語の種類について整理すると、表3のようになる。

自・他動詞はもちろん状態動詞、判断詞もすべて動詞とみなしてVで表し、真性・仮性目的語をOで表すことにすれば、中国語の基本文型

表3 動詞がとる目的語の種類

述語	真性目的語	仮性目的語
他動詞	○	○
自動詞	×	○
状態動詞 (形容詞)	×	○
判断詞 （“是”）	×	○

は次の2つにまとめられる。

- ① S＋V＋O
- ② S＋V

①は、動詞Vが他動詞で真性目的語Oをとる場合か、他動詞でない場合は、動詞Vが自動詞、状態動詞、判断詞のいずれかで仮性目的語Oをとる場合である。

(19) 我买衣服。[S＋他動詞＋真性目的語]
訳：私は服を買います。

(20) 他去上海。[S＋自動詞＋仮性目的語]
訳：彼は上海へ行きます。

(21) 今天暖和一点。
[S＋状態動詞＋仮性目的語]
訳：今日は少し暖かい。

(22) 他是老师。[S＋判断詞＋仮性目的語]
訳：彼は先生です。

②は、動詞Vが自動詞か状態動詞で仮性目的語をとらない場合である。

(23) 花谢了。[S＋自動詞（＋語気助詞）]
訳：花がしおれた。）

(24) 我很高兴。[S（＋副詞）＋状態動詞]
訳：私はうれしい。

(23)、(24)の文中における語気助詞の“了”や副詞の“很”については、次の第7節で取り扱う。

7. 中国語の標準的語順と主な品詞の位置

前節までにおいて、中国語の基本文型がS＋V＋O或いはS＋Vでまとめられることを示した。ただしVの中には、述語として使われた形容詞を状態動詞とし、また判断詞“是”も動詞の仲間として含めている。

次に、初級（一部は中級）テキストにしばしば現れるいくつかの品詞、具体的に言えば、助動詞、副詞、前置詞（句）、語気助詞などの、基本文型における語順について考える。これらの品詞は、語気助詞が文末に置かれることを除けば、基本的にSとVの間に置かれることが多い。更にそこでもある程度決まった語順が見られる。

①時間詞

例えば“今天”(今日)、“下午”(午後)、“上星期”(先週)、“明年”(来年)、…などの時を表す単語は、「時間詞」と呼ぶことがある。本稿の品詞分類では名詞の下位分類に属しているものとして扱う（第2節表1参照）。基本的に主語Sの直後か、あるいはSの前に置かれる。

- (25) 今天天气很好。[時間詞＋S＋V]
訳：今日は天気がい。 (『1冊目』 p. 16)
- (26) 中田明天上午去天安门。
[S＋時間詞＋V＋O]
訳：中田君は明日の午後天安門に行きます。 (『1冊目』 p. 20)

②語気助詞

語気助詞“吧，呢，吗，了…”は、文末に置かれる。本稿の品詞分類では、助詞の下位分類に属している（第2節表1参照）。

- (27) 你们是学生吗？
[S＋V＋O＋語気助詞]
訳：あなたたちは学生ですか。
(『1冊目』 p. 12)

- (28) 他们吃什么呢？
[S＋V＋O＋語気助詞]
訳：彼らは何をたべるのでしょうか。
(『1冊目』 p. 20)
- (29) 我买票了。[S＋V＋O＋語気助詞]
訳：私はチケットを買いました。
(『1冊目』 p. 37)

③助動詞

助動詞は主語と動詞の間に置かれる。①の時間詞と比べると、より動詞に近い位置に置かれる。

- (30) 我弟弟会开车。[S＋助動詞＋V＋O]
訳：私の弟は車の運転ができる。
(『1冊目』 p. 45)
- (31) 明天我能来学校。(我明天能来学校。も可) [時間詞＋S＋助動詞＋V＋O]
訳：あした私は学校に来られます。
(『1冊目』 p. 45)

④前置詞（句）

前置詞は、中国の文法書では‘介词’と呼ばれるが、中国語専攻ではない一般の初級中国語学習者には、英語で慣れ親しんだ呼び方の前置詞で十分であると考え。普通はそのあとに名詞が置かれ前置詞句（介詞構造）となって、動詞の直前に置かれることが多い。介詞の多くは、もともと動詞から転じたものである。

- (32) 他在餐厅吃饭。[S＋前置詞句＋V＋O]
訳：彼はレストランで食事をします。
(『1冊目』 p. 41)
- (33) 他给朋友写信。[S＋前置詞句＋V＋O]
訳：彼は友だちに手紙を書きます。
(『1冊目』 p. 45)
- (34) 我比他大两岁。[S＋前置詞句＋V＋O]
訳：私は彼より2歳年上です。
(『1冊目』 p. 53)

(34)は比較文で，“比”が前置詞，“大”が状態動詞，“两岁”が仮性目的語となっている。

また、助動詞は前置詞（句）の前方で、時間詞は助動詞より更に前方に置かれる。

(35) 我也想跟他们聊聊。

[S(＋副詞)＋助動詞＋前置詞(句)＋V]

訳：私も彼らとちょっと話をしてみたい。

(『2冊目』 p. 32)

(36) 每天早上我都被哆啦A梦叫醒。

[時間詞＋S(＋副詞)＋前置詞(句)＋V]

訳：毎朝私はドラえもんによって起こされる。
(『2冊目』 p. 42)

⑤副詞

副詞の分類は、文法書によってばらつきがあり、分類数や分類に付けられた名称も一定していない。呂叔湘の「現代汉语语法要点」中の分類に依れば次の表4のようになる。副詞の種類

副詞の種類	副詞の例
範囲副詞 (范围副词)	都, 也, 全, 光, 就
語気副詞 (语气副词)	才, 可, 却, 倒, 偏
否定副詞 (否定副词)	不, 没(有)
時間副詞 (时间副词)	刚, 正, 一, 老, 总
情態副詞 (情态副词)	正, 反, 横(着), 坚(着), 一块儿, 一起
程度副詞 (程度副词)	很, 极, 挺, 真, 更, 更加, 非常, 尤其
場所副詞 (处所副词)	处处, 到处
疑問副詞 (疑问副词)	难道

(「現代汉语语法要点」 p. 12)

副詞の置かれる位置は動詞の前方であることは決まっているが、主語を越えた文頭から動詞の直前まで、その置かれる位置の範囲はかなり広い。以下に表4の各種類の副詞について、例文を挙げてみる。

(i) 範囲副詞

(37) 我们都学习汉语。[S＋副詞＋V＋O]

訳：私たちはみな中国語を学びます。

(『1冊目』 p. 21)

(ii) 語気副詞

(38) 我可看不懂中文的。[S＋副詞＋V＋O]

訳：私はとても中国語の（本）は見ても分かりません。

(『さらなる一歩』 p. 50)

(iii) 否定副詞

(39) 我不吃炒饭。[S＋副詞＋V＋O]

訳：私はチャーハンを食べません。

(『1冊目』 p. 21)

複数の副詞がある場合、否定の副詞“不”や“没（有）”は動詞に一番近い位置に置かれることが多い。しかしこれは絶対的基準ではなく、「全否定」と「部分否定」などでは、否定の副詞の位置が、他の副詞より、動詞から遠くなることもある。

(40) 那里的菜一点儿也不贵。

[S＋副詞＋副詞＋副詞＋V]

訳：あそこの料理は少しも（値段が）高くない。
(『2冊目』 p. 36)

(41) 我就再也没迟到过。

[S＋副詞＋副詞＋副詞＋副詞＋V]

訳：私はもう二度と遅刻をすることはありませんでした。(『2冊目』 p. 42)

(42) 我们都不是留学生。

[S＋副詞＋否定副詞＋V＋O] (全否定)

訳：私たちは皆留学生ではない。

(『ポイント』 p. 43)

(43) 我们不都是留学生。

[S＋否定副詞＋副詞＋V＋O] (部分否定)

訳：私たち皆が留学生ではない。

(『ポイント』 p. 43)

[S + 副詞 + V + O]

訳：私たちはどこでも暖かい歓迎を受けた。(『中国語辞典』“到处”の部)

(iv) 時間副詞

(44) 我刚从梦中醒来。

[S + 副詞 + 前置詞 (句) + V]

訳：私は夢からたった今覚めた。

(『中国語辞典』“刚”の部)

(viii) 疑問副詞

(49) 难道我听错了?[副詞 + S + V + 語気助詞]

訳：まさか私が聞き違えるなんてことがあるだろうか。

(『中国語辞典』“难道”の部)

(v) 情態副詞

(45) 我们一起在外边儿的网球场练习。

[S + 副詞 + 前置詞 (句) + V]

訳：私たちは一緒に外のテニスコートで練習します。(『2冊目』 p. 39)

この例のように、副詞は主語 S より前の文頭に置かれることもある。

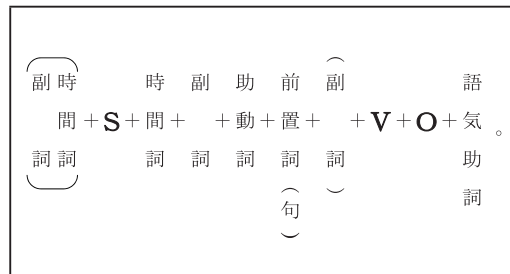
これまでに出てきた品詞の基本文型における標準的語順を整理すると、次の図1のように整理することができる。

(46) 我跟你一起看了香港电影。

[S + 前置詞 (句) + 副詞 + V + O]

訳：私はあなたと一緒に香港映画を見ました。(『さらなる一步』 p. 58)

図1 主な品詞の語順



例文(45), (46)のように、副詞は前置詞 (句) の前に置かれることもあるし、うしろに置かれることもある。尚(46)では、筆者が省略されていた主語“我”を付け加えて、文を作り変えてある。

(vi) 程度副詞

(47) 我很高兴。[S + 副詞 + V]

訳：私は楽しい。(『1冊目』 p. 17)

状態動詞の平叙文 (いわゆる形容詞述語文) では、一般に状態動詞 (形容詞) の前に何らかの程度副詞が必要とされ、よく使われるのが“很”である。

語気助詞は文末に置かれるが、その他の品詞は基本的に主語 (S) と目的語 (O) の間に置かれる。更に S と O の間でもある程度順序が決まっていて、基本的には時間詞、副詞、助動詞、前置詞 (句) の順である。ただし、副詞については、置かれる位置範囲が広い。副詞以外は、品詞の種類によってその置かれる順序はある程度決まるが、副詞の場合は品詞だけが位置を決定する要因ではなく、何に焦点を当てて表現したかという焦点の当て方に影響されているようである。

(vii) 場所副詞

(48) 我们到处受到热烈的欢迎。

8. おわりに

初級中国語のテキストの中には、中国語の基本文型について（主語）＋（動詞）＋（目的語）と書かれているものは実際にある。また助動詞や前置詞（句）などが新たな品詞として導入されるときには、それらの置かれる場所を明示しているものもある。しかし学習者が語順について間違いを起しやすなのは、基本文型と複数の品詞の位置を同時に処理しなければならないときであると考えられる。本稿はこの点を念頭に置いて語順を整理した。

第5,6節では、形容詞の述語的用法に対しては状態動詞、また動詞“是”に対しては判断詞という用語を使用した。初級中国語の授業では、やはり多くのテキストで使用している形容詞や動詞という言い方を使用し、用語をやたらに増やして学習者に負担をかけるべきでないと考える。しかし、中国語の語順に関して混乱を来しているような学生に対しては、本稿で整理した方法で説明するのが理解しやすいと考える。

今回は初級（一部は中級）中国語学習者を対象としたため、非常に単純な文ばかりを取り上げた。語順に関して採り上げていない問題が、まだ幾つも残っている。例えば、文成分については限定語（連体修飾語）、状況語（連用修飾語）や補語（様態補語等）などの語順、また構文面から連動文、存現文、処置文、複文などの語順についても考える必要がある。また今回例文を調査している段階で浮かび上がった問題に、副詞の語順の多様性があった。単に品詞の違いが語順を決定しているのではなく、何に焦点を当てて表現するかということが、副詞とその他の品詞の順序に影響しているように思われる。

残されたこれらの問題を、今後の研究課題と解決していきたいと考える。

参考文献

- 呂叔湘 1980 「現代汉语语法要点」(呂叔湘主編『現代汉语八百詞』巻頭pp. 1-41) 商務印書館
 呂叔湘 1983 『中国語語法分析問題』大東文化大学外国語学部中国語学科研究室訳
 朱德熙 2005 『文法講義 朱德熙教授の中国語文法要説』(杉村博文, 木村秀樹訳) 白帝社
 藤堂明保 1980 『中国語概論』大修館書店
 中国語学研究会編 1970 『中国語学新辞典』光生館
 高橋君平 1963 『漢語形体文法論』大安
 安井稔編 1993 『新言語学辞典』研究社
 デイヴィッド・クリスタル 1992 『語学百科事典』(風間喜代三長谷川欣佑監訳) 大修館書店

例文出典

- 劉穎, 喜多山幸子, 松田かの子著『1冊目の中国語』講読クラス 2013年 白水社
 劉穎, 柴森, 小澤正人著『2冊目の中国語』講読クラス 2013年 白水社
 竹島金吾監修, 尹景春, 竹島毅著『中国語さらなる一步』2011年 白水社
 楊曉安著『ポイントマスター・初級中国語』2013年 同人社
 伊地智善継編『中国語辞典』2002年 白水社

尚, 出典のテキスト名は、初めの数文字を使って、『1冊目』、『さらなる』、『ポイント』のように省略して示した。また、例文で出典が明示されていないものは、筆者自身が作成したものである。